

# 満願寺の瓦からみる 三浦一族

—満願寺遺跡調査成果報告会—

2024 1/28 ㊥



シンポジウム

## 満願寺の瓦からみる三浦一族

### —満願寺遺跡調査成果報告会—

開催時期：2024年1月28日（日）

場 所：午前の部 満願寺（横須賀市岩戸1-4-9）

午後の部 ヴェルクよこすか第1会議室（横須賀市日の出町1-5）

主 催：横須賀考古学会・神奈川県立歴史博物館

後 援：三浦一族研究会・横須賀市教育委員会

[午前の部] 満願寺見学会

講 師：中三川 昇

集 合：10:00までに満願寺へお集まりください

\*1時間ほどの見学会です

\*参加自由・現地集合

\*その後、各自でヴェルクよこすかの会場へ移動

[午後の部] シンポジウム

司会進行：池谷 初恵・松吉 里永子

集 合：13:30までにヴェルクよこすか第1会議室へお集まりください（先着90名）

13:30

開会

13:30～13:40

趣旨説明

13:40～15:50

各報告

① 13:40～14:00 中三川 昇

満願寺と周辺の中世遺跡

② 14:00～14:20 小林 康幸

満願寺の瓦の年代とその系譜

③ 14:20～14:40 高橋 香

鬼瓦について

14:40～14:50 休憩

④ 14:50～15:10 押木 弘己

満願寺遺跡出土の土器・陶磁器

—鎌倉出土品との比較から—

⑤ 15:10～15:30 渡邊 浩貴

佐原一族と都市鎌倉・満願寺

⑥ 15:30～15:50 大澤 慶子

満願寺の木造菩薩立像について

15:50～16:00 会場設営準備・休憩

16:00～16:30 質疑応答

※シンポジウムおよび本リーフレットは令和3年（2021）度～令和5年（2023）度 神奈川県立歴史博物館  
総合研究「横須賀市満願寺出土中世瓦の分析を通じた永福寺式瓦と鎌倉御家人の総合研究」（研究代表者：渡邊  
浩貴）の成果の一部である。

# 岩戸満願寺と周辺の中世遺跡

中三川 昇（元横須賀市教育委員会）

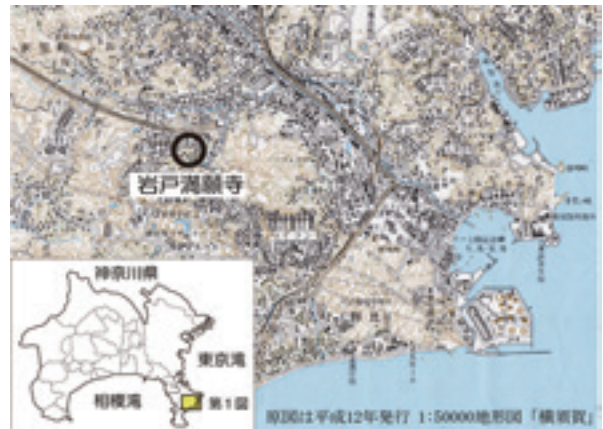
## 1. 岩戸満願寺について

### (1) 概要

岩戸満願寺（以下、満願寺とする）は横須賀市岩戸1丁目4番地（第1図）に所在する臨済宗建長寺派の岩戸山を山号とする寺院です。北側に丘陵を背負い岩戸川に面した場所に立地しています（第3図）。満願寺は寿永3（1184）年に三浦一族の佐原義連が一堂を建立し、平家滅亡後に新ためて大伽藍を建立し満願寺と号したと伝わる寺院であります。伽藍整備が一段落したのは、貞応3（1224）年に義連三男の佐原家連が京都泉涌寺の開山俄禅房俊仍を招請し梵宇の供養を行った頃ではとも考えられています（上杉 2007 ほか）。また、現本堂背後に現在は文化財収蔵庫にある運慶に近い仏師の作と考えられる重要文化財「木造菩薩立像・木造地藏菩薩立像」等が収められていた観音堂があり、その東側に佐原義連墓と伝わる凝灰岩製の五輪塔があります（第4図）。現在の寺域は現本堂の周辺地域のみですが、盛期はより広域と考えられ、その想定範囲が満願寺遺跡とされています。隣接地には中世遺物が出土した満願寺東横穴群や巴御前墓と伝わる凝灰岩製の大型五輪塔等があります（第3図）。

### (2) 満願寺と周辺の主な中世遺跡等（第2図）

現在の満願寺は、岩戸川により形成された狭小な谷



【第1図】 岩戸満願寺の位置図（1/50,000）

戸の中ほどに位置しています。周囲の地形は大きく改変されていますが、かつては東京湾岸の久里浜地域から、三浦一族の拠点的地域であった大矢部・衣笠地域を繋ぐ経路上にありました。現在、久里浜湾以西の低地は市街地化していますが、この地域の大半は寛文7（1667）年完成の内川新田により陸地化した地域です。開発以前の具体的環境は不明ですが、鎌倉時代前後の時期にはその大半が水域（古久里浜湾）であったと考えられます。

当地域の平安末から鎌倉・室町時代の主な遺跡や神社は古久里浜湾の西岸地域に偏在しています。まず、現久里浜湾に接した八幡久里浜（旧村名、以下同）で



【第2図】 岩戸満願寺と周辺の主な中世遺跡等の分布図（1/45,000）

は海際に寿永元(1182)年に源頼朝が頼家誕生を祝して神馬を奉納し、文治元(1185)年に頼朝と政子が参拝した栗濱明神(現住吉神社)があります。大矢部方面に推定古道を進むと平安時代末から中世の遺構・遺物が出土した蓼原遺跡・八幡神社遺跡・蓼原東遺跡等があり隣接する久村には平安仏があった丸山不動堂跡や千住院跡があります。推定古道をさらに進むと満願寺です。その北西が三浦一族に関わる寺社等が密集する大矢部地域で清雲寺・薬王寺跡、頼朝創建とも伝わる満昌寺等が位置しています。大矢部西北西の丘陵に頼朝挙兵後に行われた「衣笠合戦」の舞台と伝わる衣笠城跡や平安時代に遡る坂ノ台経塚・大善寺等があります。なお、大矢部地域は谷戸口付近の平安時代後期の土器・馬具等が出土した泉遺跡以外に中世以前の遺跡は少なく、平安末以降に開発が進化した地域であったかと思われます。満願寺は東京湾岸の久里浜地域から衣笠地域に連なるこのような中世遺跡群のほぼ中間地で、「岩戸」の名の如く海浜部から大矢部地域に至る経路の入口・要衝でもあったかと思われます。

## 2. 満願寺遺跡の発掘調査の経緯と経過

昭和48(1973)年に重要文化財等の収蔵庫建設工事が行われました。当初の建設予定地は現本堂西側でしたが、中世瓦が多数出土し建設予定地が現本堂の南東側に変更され、同年12月に変更地の試掘調査が行われました(第4図)。その結果、中世以降の遺構・遺物が確認されたことから、収蔵庫の位置は現在地に再度変更されました。昭和63(1988)年に伽藍整備のための遺構確認調査が行われ、三棟以上の建物が想定できる礎石や礎石跡、柱穴跡、瓦溜等が確認されました(第3～4図)。平成4(1992)年3月に確認調査報告書(横須賀市教委1992)が刊行されましたが、内容は遺構・遺物の概要等の記載にとどまり、瓦類も整理途中の状態でした。

## 3. 満願寺遺跡の主な遺構等(第5図)

満願寺遺跡の調査では、三棟以上の建物が想定できる礎石や礎石跡、柱穴跡、瓦溜などが確認され、多量の中世前期の瓦片が出土しました。土器・陶磁器類、鉄釘・北宋銭なども出土しましたが、量はわずかでした(出土遺物については別稿あり)。確認された主な遺構は、瓦葺の仏堂であったと考えられる仮称「中心建物」とその東西で確認された仮称「附属建物A・B」2棟、中心建物の前面に広がる瓦溜Ⅱ・Ⅲと西側附属



【第3図】 満願寺遺跡と周辺の遺跡 (1/4,000)



【第4図】 満願寺遺跡の現況地形と調査地域 (1/1,000)

建物北側の瓦溜Ⅰです。また、瓦溜Ⅱ付近より以南の地域では時期を違えた数次にわたる地業層が確認されています。以下は各遺構の概要です。

(中心建物)

旧参道西側のDトレンチの東端部から2か所、参道を挟んだ東側で1か所の計3か所の根石を残した礎石抜き跡が確認されました(根石1～3)。いずれも径1m前後の規模で、現在参道脇にある径80cm前後の安産岩製大型礎石6個等を設置するのに相応な規模・形状です。根石3の東約3mの位置で基壇端部と雨落ち溝かと推定

される部分も確認されていますが、西側のDトレンチ部分では確認されていません。礎石抜き跡の芯々間の距離は根石1～2間が約3.1m、根石2～3間が約7.8mで、全体では約11mを計ります。根石2と3間は未調査ですが未確認の礎石抜き跡が埋もれていると考えられます。この建物の奥行きは確認されていませんが、おそらくは柱間3間四面の瓦葺仏堂であったと考えられます。

(附属建物ほか)

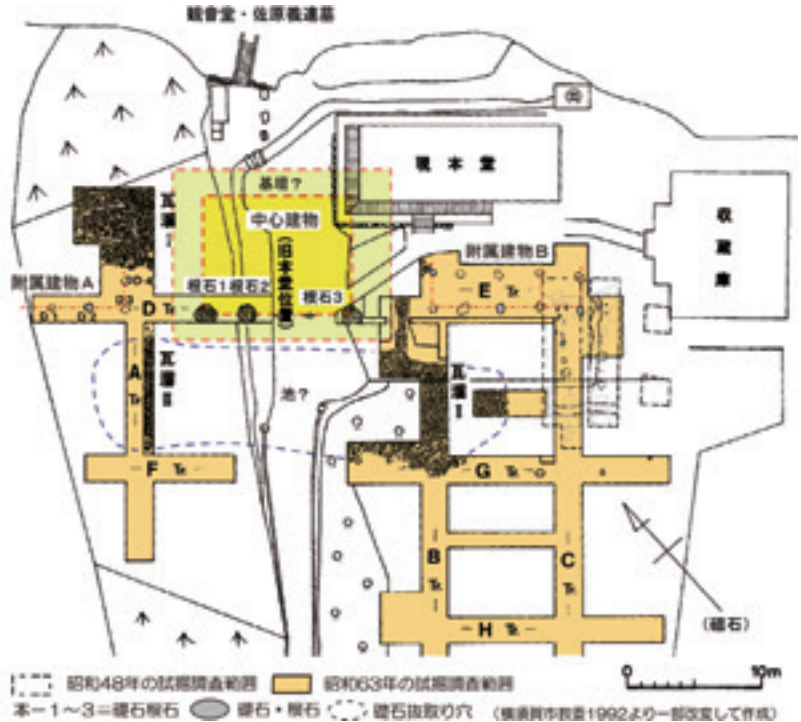
中心建物の東西で規模不明の建物2棟が確認されています。いずれも中心建物の礎石から約6m間隔を置いて、礎石列の並びを揃える形で配置されており、中心建物の存在を前提として順次建てられたと考えられます。なお、これらの建物が瓦葺であったか否かは不明です。

附属建物Aは西側のDトレンチ内で確認された遺構で、小型の礎石2個と礎石抜き跡2か所が確認されています。報告書では桁行2間(柱間約2.7m前後)以上、梁行1間(柱間約2.3m)の建物が想定されていますが、梁行の状況は不明で、独立した2間四面や3間四面などの小規模な仏堂等であった可能性も考えられます。また、礎石抜き跡の根石中に中世瓦が混在することから、報告書では後世の中心建物再建時の付加建造物かとも指摘されていますが順次建てられた建物とも考えても矛盾はありません。この点は附属建物Bについても同様です。

附属建物Bは東側のEトレンチ内で確認されました。小型の礎石3個と礎石抜き跡7か所が確認され、報告書では桁行4間(柱間約2.5～3m前後)、梁行1間以上(柱間約2.4m前後)の建物が想定されていますが、附属建物B同様3間四面等の小規模な仏堂等であった可能性も考えられましよう。

瓦溜は三か所確認されています。Aトレンチ北端部の瓦溜Ⅰ、同トレンチ中央の瓦溜Ⅲ、B・Gトレンチなどの中心建物前面の瓦溜Ⅱです。報告書では、瓦溜Ⅰは比較的小型の瓦片が乱雑に堆積した状態であるのに対し瓦溜ⅡとⅢは瓦片が敷き並べられたような状態で確認されていることから、単なる廃棄ではなく埋立等の意図的な行為の結果かとも指摘されています。

また、瓦溜ⅡとⅢを東西30m南北10m前後に広がる一体のものである可能性があり、その場合中心建物の前面に所在した可能性のある池を埋め、表面に瓦を敷き



【第5図】 満願寺遺跡の調査区と遺構配置図(1/500)

並べた結果ではとも指摘されています。しかし瓦溜の下層は基本的に未調査で実態は不明です。また、中心建物と同時期であったとすると、基壇端部に接する位置となり密着し過ぎた位置であるかと思われます。なお、瓦溜Ⅰは北側の竹林となっている平場に所在した可能性のある未知の建物(義連建立時の満願寺?)にも関わる可能性も考えられます。

満願寺遺跡については過去の調査記録を十分に再確認した上で、更なる調査が待たれるところです。

#### 4. 周辺の中世遺跡について

満願寺周辺の中世遺跡は多数あるが、久里浜地域の遺跡や満願寺遺跡、佐原の泉遺跡等を除くと本格的な発掘調査の手が及んでいる遺跡は少ないのが現状です。中世瓦が出土した寺院は薬王寺遺跡と縄叩きの平瓦片がわずかに出土した満昌寺がありますが、ここでは多様な中世瓦が出土し、出土遺物等についての検討も行われている薬王寺遺跡を中心に紹介します。

薬王寺は和田義盛が建暦2(1212)年に父杉本義宗と叔父三浦義澄の菩提を弔うため建立したと伝わり、明治9(1876)年頃に廃寺になっています。現在は三浦義澄墓と伝わる石塔が市指定史跡「薬王寺旧跡」の中に残るのみですが、近隣の満昌寺に薬王寺本尊の薬師如来像や薬王寺にあった元応2(1320)年銘双式板碑等が残されています。最後の仏堂は薬王寺旧跡の南側にあったらしく、山門跡と伝わる場所に「駒繫石」があります。

西側の小字名は「池田」で、池の存在が示唆されています。その北側にはオオミドウ（大御堂か）の地名があり、仏堂の存在を示唆している。「オオミドウ」の西側には、三浦義澄嫡男の義村を祭神とする近殿（ちかた）神社があり、その境内と近辺からは中世瓦が出土しており、未発見の仏堂が存在したと考えられます。また、薬王寺旧跡の北側に隣接する薬王寺やぐら群からも中世の瓦と土器・陶磁器等が出土しています。近殿神社周辺出土の瓦には鎌倉時代前期から中頃のもの（第8図1～3）と室町時代頃（第8図4～5）のものがあります。特に前者の瓦は現大阪府の和泉国又は河内国との国境近辺で焼かれた瓦で、河内守護（三浦義村・泰村）、河内守（三浦光村）、和泉守護（佐原義連・盛連）等との関連が窺われる瓦です。薬王寺やぐら群の瓦は鎌倉時代末頃から室町時代頃のもので、近殿神社周辺の瓦とも異なり、この近辺にも瓦を用いた仏堂があったことが窺われます。このように見ると、あくまで推定ではありますが山を背に東西に仏堂が並び、南側に苑池を配した寺院の姿が浮かび上がります。薬王寺創建の経緯や往時の姿については記録が無く不明ですが、三浦氏宗家や宗家を継ぐ佐原氏・佐原系三浦氏らが関わり、比較的長期に亘って維持・整備された寺院であったのではとも思われます。薬王寺遺跡は義村以降の三浦一族と大矢部地域の寺社等との繋がりを示す重要な遺跡の一つで、岩戸満願寺の盛衰にも関わる寺院であったと考えられます。

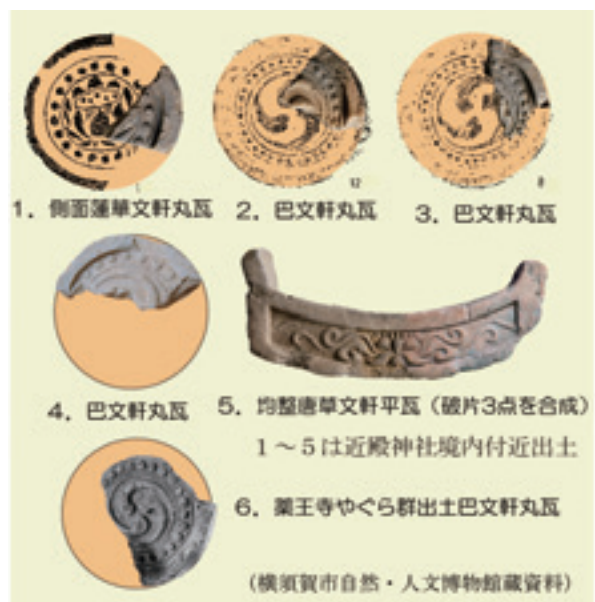
また、三浦一族初代とされる三浦為通（永保3（1083）年没）の創建と伝わる円通寺跡と背後の深谷やぐら群については昨年度から横須賀市教育委員会による分布調査及び確認調査が行われています（磯口2023）。これまでに深谷やぐら群のやぐら分布状況が確認され、深谷やぐら群前面の平場から円通寺跡の可能性が高い地業面等が確認されています。調査は来年度以降も継続する予定とのことで、近い将来それらの姿がより明らかになると思われます。深谷やぐら群と



【第6図】 大矢部地域中心部の主な中世寺社と遺跡



【第7図】 薬王寺遺跡と関連遺跡（1/2,500）



【第8図】 出土瓦の一部（縮尺不同）

円通寺には、現在は清雲寺にある南宋仏の観音菩薩像坐像（重要文化財）や三浦初代の為通・三代の為継の墓と伝わる五輪塔、横須賀市最古の文永8（1271）年銘板碑等があった場所であり、調査の進展により三浦一族草創期の様相の一端がより明らかになるものと思われます。

【参考文献】

磯口健太郎 2023 「深谷ヤグラ群」『第23回 三浦半島地区遺跡調査発表会 発表要旨』横須賀考古学会  
 小林康幸・高橋香 2019 「相模」『中世瓦の考古学』高志書院  
 上杉孝良 2007 『改定 三浦一族』横須賀市  
 穴戸信吾ほか 2004 『薬王寺やぐら群』かながわ考古学財団発掘調査報告書 176  
 横須賀市育委員会 1992 『岩戸満願寺』横須賀市文化財調査報告書 第25集

# 満願寺の瓦の年代とその系譜

小林 康幸（鎌倉市役所）

## はじめに

満願寺遺跡出土瓦の再整理を行い、合計 13,813 点（総重量約 2,500kg）の瓦を確認し、報告書にはそのうち 133 点を掲載しました。これらの瓦の整理から明らかになった瓦の年代やその系譜などについて報告します（集計表参照）。

## 1 瓦の分類

出土した瓦のうち軒丸瓦と軒平瓦については瓦当文様によって分類を行い、また丸瓦と平瓦については胎土（粘土）と叩き目によって下記のとおり分類しました。

### (1) 軒丸瓦・軒平瓦の分類

- ・セット 1  
軒丸瓦MA II（蓮華文軒丸瓦）と軒平瓦MN III（唐草文軒平瓦）の組合せ。
- ・セット 2

軒丸瓦MA I 01（三巴文軒丸瓦）と軒平瓦MN I 01（唐草文軒平瓦）の組合せ。

### ・セット 3

軒丸瓦MA I 02（三巴文軒丸瓦）と軒平瓦MN I 02（唐草文軒平瓦）の組合せ。

セット 2 とセット 3 の違いは瓦当文様の珠文の粗密（間隔）の違いです。どちらのセットも同時期に使用されたと考えられます（第 1 図参照）。

### (2) 丸瓦・平瓦の分類

#### 胎土による丸瓦の分類

A 類…精良な胎土（0.006%）、B 類…やや粗悪な胎土（99.992%）、C 類…陶器質（0.002%）

#### 胎土による平瓦の分類

A 類…精良な胎土（1.3%）、B 類…やや粗悪な胎土（98.5%）

#### 叩き目による平瓦の分類

縄の叩き目→満願寺 I 期（少量）、格子の叩き目

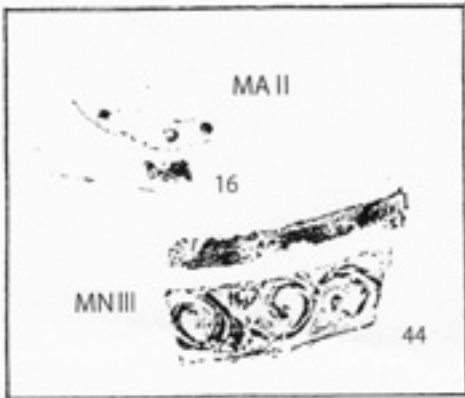
岩戸満願寺遺跡出土瓦集計表

点数は破片数、接合した破片は 1 点と数えた

種別	胎土分類	A (精良)		B (粗)						C (陶器質)		不明		計 点数
		点数	重量	B		三浦		くすべ (三浦宮)		点数	重量	点数	重量	
				点数	重量	点数	重量	点数	重量					
軒丸瓦	MA I 01					10	5.00							10
	MA I 02					4	1.54	1	1.50					5
	MA II									1	0.08			1
	不明					13	3.46							13
軒平瓦	MN I 01					6	2.67	2	0.16					8
	MN I 02					3	1.82							3
	MN I 03					1	0.06							1
	MN II							2	0.50					2
	MN III									4	1.60			4
	不明					3	0.75	8	1.39					11
丸瓦		8	0.50	1	1.65	12	17.86	4	3.69	4	0.49			29
	(報告書不掲載)	9	1.10	2344	406.03			283	26.50					2636
平瓦	01 縄叩き	3	2.50	2	0.38									5
	02 格子目叩き	1	0.15			13	27.35	3	1.67					17
	03 格子目叩き			1	0.60	5	6.60	2	1.42					8
	その他					1	0.90			5	1.08			6
	(報告書不掲載)	149	26.60	8143	1390.95	824	189.90	1924	351.00			4	0.20	11044
鬼瓦						3	1.58	1	0.32			2	6.03	6
道具瓦		1	0.10	2	3.15			1	0.40					4
計		171	30.95	10493	1802.76	898	259.49	2231	388.55	14	3.25	6	6.23	13813 点
						粗計	13622	2450.80						重量 2491.23Kg

【集計表】 岩戸満願寺遺跡出土瓦集計表

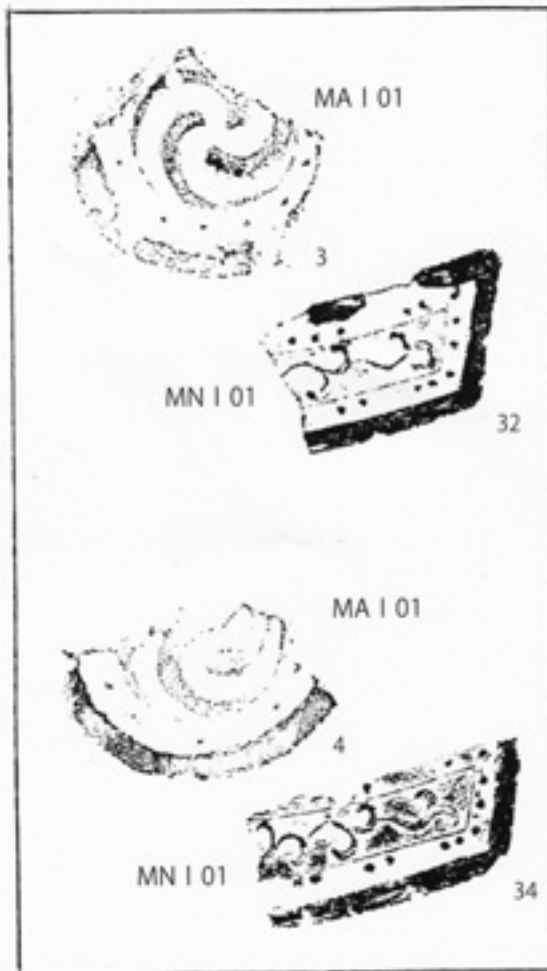
軒瓦セット1



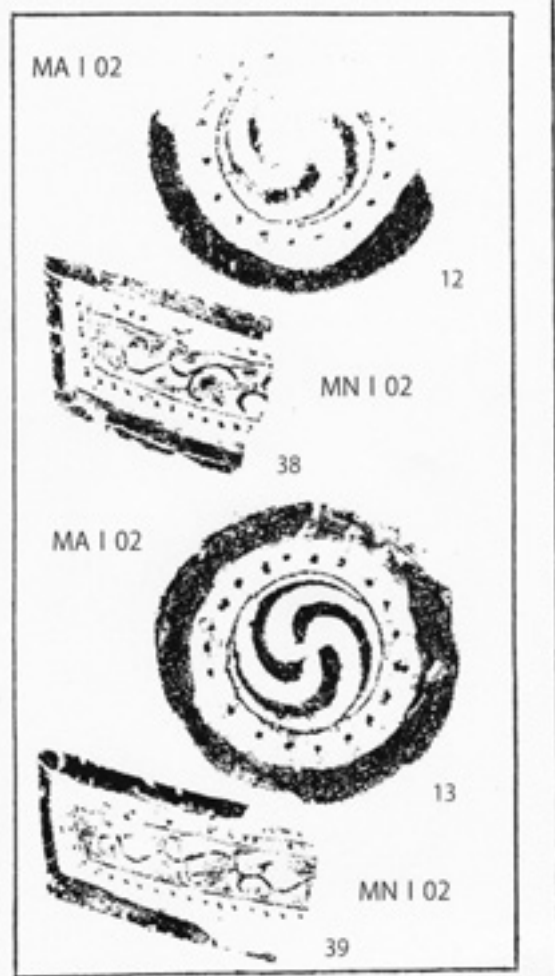
祖型

八事裏山窯出土の軒瓦

軒瓦セット2



軒瓦セット3



八事裏山窯系の系譜

【第1図】 満願寺遺跡出土瓦のセット関係



満願寺Ⅰ期の  
平瓦凸面  
MHA01

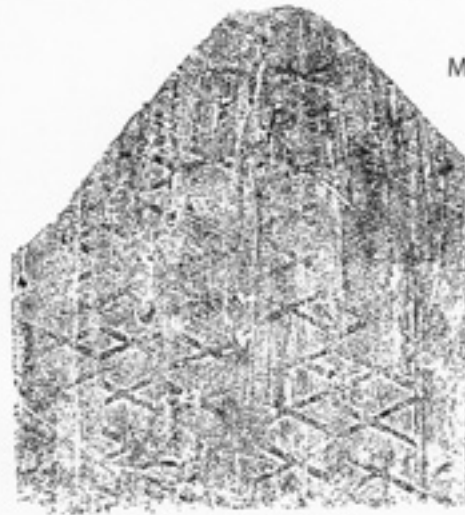


永福寺Ⅰ期の  
平瓦凸面



88

MHB02



100

満願寺Ⅱ期の平瓦凸面



MA I 01

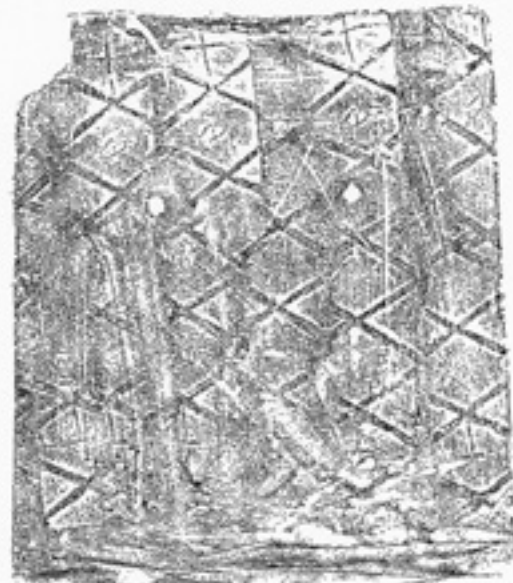
3



満願寺Ⅱ期の軒瓦



永福寺Ⅱ期の軒瓦



【第2図】 満願寺遺跡出土瓦と永福寺跡出土瓦の比較

→満願寺Ⅱ期（多量）

## 2 瓦の年代

分類した瓦の年代を考えるために、文献史料によって伝えられている満願寺の歴史を参考にしながら分類した瓦の年代を考えます。

満願寺Ⅰ期瓦➡満願寺の創建に使用された瓦。寿永三年（1184）佐原十郎義連。該当するのは軒瓦セット1と縄の叩きの平瓦。

満願寺Ⅱ期瓦➡満願寺の伽藍拡大。貞応三年（1224）。京都・泉涌寺の開山月輪大師俊仍（しゅんじょう：1166～1227）が佐原家連の三浦館に招かれ梵宇を供養（『泉涌寺不可棄法師伝』）。この「梵宇」が満願寺と考えられます。佐原家連は義連の子。該当するのは軒瓦セット2及びセット3と格子の叩きの平瓦。

このようにして推定した瓦の年代をより精度の高いものにするため、瓦の年代がはっきりしている鎌倉永福寺の瓦と満願寺の瓦を比較してみます（第2図参照）。

永福寺Ⅰ期瓦➡永福寺の創建。建久五年（1194）源頼朝による創建。平瓦はほとんどが縄の叩き目。

永福寺Ⅱ期瓦➡永福寺の修理。寛元二年（1244）～宝治二年（1248）。平瓦はほとんどが格子目の叩き目。

比較の結果から先に推定した満願寺の瓦は、鎌倉永福寺の瓦よりも10年程度古い、相模国で最も古い中世瓦である可能性が明らかになりました。

## 3 瓦の生産地

では満願寺の瓦はいったいどこで生産された瓦なのでしょう。瓦の胎土（粘土）の観察結果から考えてみます。

セット1とした軒丸瓦MAⅡ（蓮華文軒丸瓦）と軒平瓦MNⅢ（唐草文軒平瓦）は表面に陶器にみられるような自然釉（うわぐすり）がかかっている硬質の瓦です。これらの瓦は愛知県名古屋市の八事裏山窯で生産された瓦と考えられます。つまり尾張国から相模国にもたらされた瓦です。当時、八事裏山窯で焼かれた瓦は、満願寺以外には永福寺をはじめとする鎌倉市内の数か所と伊勢原市内でしか発見されていません。極

めて限定的にしか流通しない特殊な瓦であったことがわかります。

セット2、3とした軒丸瓦MAⅠ01、MAⅠ02（三巴文軒丸瓦）と軒平瓦MNⅠ01、MNⅠ02（唐草文軒平瓦）は地元（三浦半島地域）で生産された瓦と考えられます。残念ながらこれらの瓦を焼いた窯跡はまだ三浦半島周辺では発見されていません。

満願寺Ⅰ期の瓦とⅡ期の瓦では生産地が異なりますが、瓦の瓦当文様、特に軒平瓦の文様をみるとⅡ期の唐草文もⅠ期の八事裏山窯の唐草文に似た文様であることがわかります。つまり満願寺Ⅱ期瓦も質的にはⅠ期瓦と異なる瓦ではありますが「八事裏山窯系」の瓦ということが出来るでしょう。

## 4 瓦の系譜と満願寺の歴史的重要性

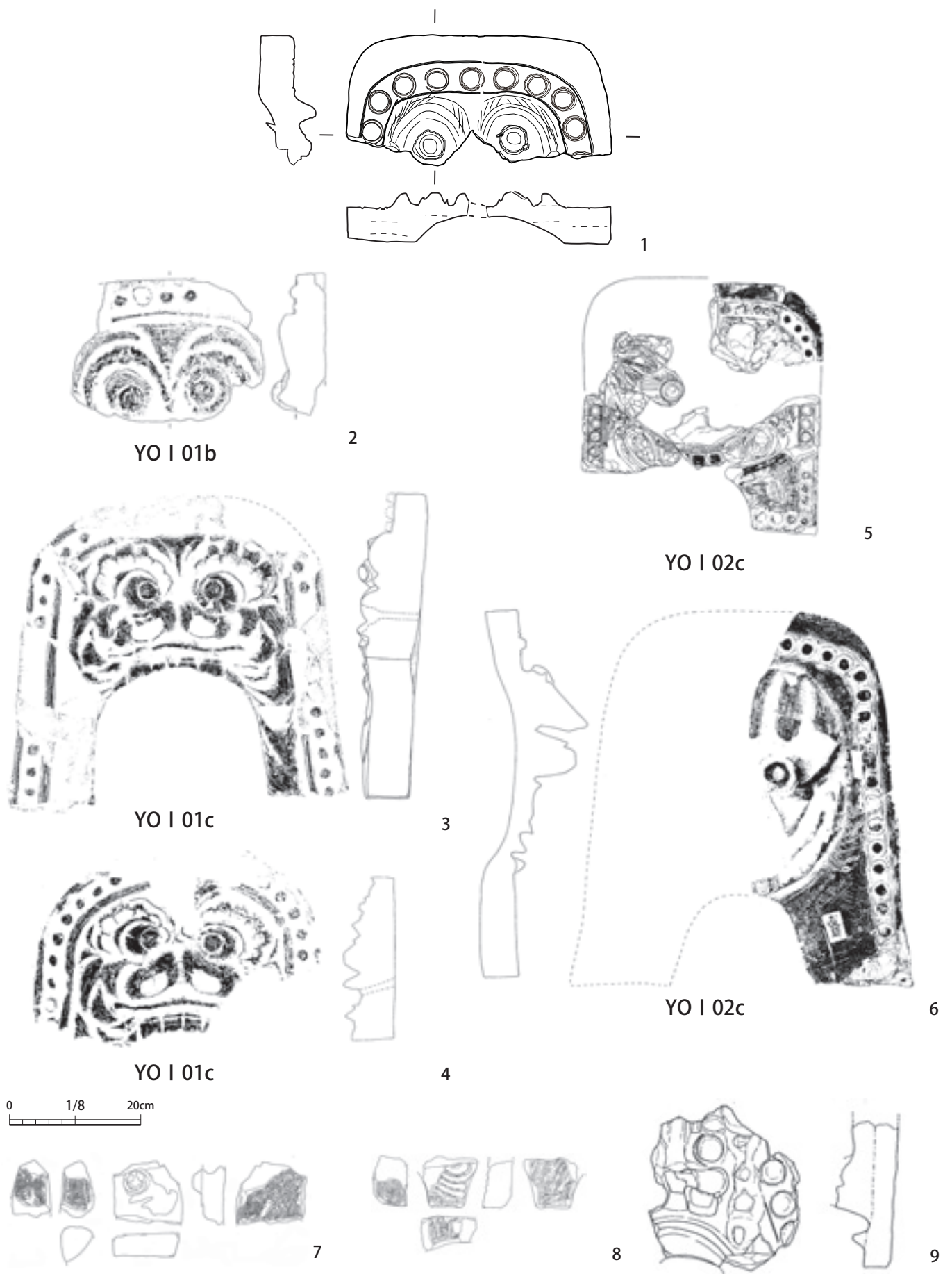
このように満願寺の瓦（特にⅠ期の瓦）は尾張と相模の関係を強く示す瓦です。満願寺の境内には現在も多くの瓦が埋もれています。過去の発掘調査が限定的な範囲で実施されたこともあり、瓦を葺いていた鎌倉時代の寺院建築の全体像はまだ不明です。見事な出来栄の本尊などの仏像の存在からも満願寺の繁栄ぶりは想像に難くありません。

創建以来の満願寺の繁栄は、この寺を造営した三浦一族、佐原氏が尾張や京都と強い関係性を有していたことの象徴であると考えられます。

すでに述べましたとおり、満願寺は源頼朝が鎌倉に建立した大寺院・永福寺よりも約10年早く瓦葺の寺院として建てられています。創建から40年ほどが経った頃にはさらに伽藍の拡大が行われていたようです。満願寺は当時の相模国を代表する大寺院であったと考えられ、その背景に佐原氏の仏教崇敬、文化摂取についての並々ならぬ熱意や尾張・京都との関係性・人脈、そして財力の大きさが窺われます。

これまではどうしても日本中世史のなかでは源頼朝や鎌倉幕府、執権北条氏を中心的なテーマとした研究が多くありましたが、鎌倉という場所を支えた周辺地域、相模国全体についての研究はやや低調な感じがありました。今後は満願寺や三浦一族、佐原氏についての研究が大いに進展することが期待されます。その意味で満願寺の瓦に関する研究がそのスタートになるのではないかと思います。





【第2図】 相模国内出土鬼瓦

鬼瓦2片、中世遺構外から1片が確認されています。堀から出土している鬼瓦片は、半円状に凸出した部位がありますが、珠文帯に相当するのか眼に相当するのかわかりません。報告では「円形の押し付け」とあることから手づくりの部類にはいるでしょう。遺構外から出土したとする鬼瓦は葺き脚の右側部が残存するもので、表面、側面はヘラナデにより調整されており、表面はヘラ状工具によって同心円を描いています。沈線はかなり深めにかかれており、「髭を巻き上げた表現をする部分と考えられる」とあります。しかし、この脚部分に巻きひげを表現するのは古代に多い表現で、中世では永福寺、法隆寺の大湯屋の大棟にみられるものの少ない傾向にあります。

真勝寺(大磯町)【第2図9】 真勝寺は、大磯町に所在する行基創建といわれる寺院で、12世紀以降は六所神社の別当寺となったとされています。また、治承4(1180)年富士川合戦の帰途に源頼朝が論功行賞を行った地とされています。中世瓦は採集瓦であるが、数点確認されており、軒平瓦は陽刻上向き剣頭文、軒丸瓦は左回り、右回りがあります。鬼瓦は、珠文帯と鬼面が若干残り、珠文と眼、鼻の部分が残存する資料です。珠文は円形の工具を押印する手づくりによる成形です。

史跡称名寺境内(横浜市) 史跡称名寺は横浜市に所在します、鎌倉後期に創立された真言律宗系の寺院で、金沢北条氏の菩提寺です。13世紀後半～14世紀前半の永福寺Ⅲ期の時期の瓦の特徴に類似し、鬼瓦片は1点確認されています。珠文帯部分の珠文が2か所残存するもので、沈線などの区画があるかは小片の為不明です。厚さは2.3cmとやや薄での手づくりです。胎土は微妙な砂粒を含み、色調は灰白色です。1点のみの出土であるため判断しかねますが、円形の工具を押印した可能性が高いです。

#### 岩戸満願寺の鬼瓦のルーツは—相模国の鬼瓦のルーツは—

岩戸満願寺から出土している鬼瓦は、①珠文帯をみると押印していること、②固定装置が把手のタイプの鬼瓦であることから、永福寺でみられる範による鬼瓦より若干新しい要素が含まれています。となると、相模で最初に導入された鬼瓦は永福寺の鬼瓦と考えられますが、このモデルとなった鬼瓦はどここの資料になるのでしょうか。院政期以降、瓦が使用される建物や生産地が限定的になるため、参考になる地域が限られてきます。その中で、構成要素、眼の表現などを参考に

すると、鳥羽離宮の金剛心院の鬼瓦があげられます【第3図1】。

鳥羽離宮は、応徳3(1086)年の中頃、白河天皇による院政が開始される直前に着手され、白河天皇、鳥羽天皇によって約70年間継続された離宮です。院政期の鬼瓦は、範により製作された鬼瓦で、珠文帯は界線も沈線ではなく凸線で表現され、眼や眉、ほほ、鼻の部分が全体的に突出しています。鳥羽離宮の瓦生産は、鳥羽離宮南殿及び東殿は播磨、尾張(東殿のみ)が担い、11世紀後半から12世紀後半まで供給されたと推定されています。金剛心院から出土している鬼瓦の生産地は播磨であり(上村ほか2017)、確実な同範の鬼瓦は確認されてはいませんが、林崎三本松瓦窯、神出窯から鬼瓦が出土しています【第3図2】。金剛心院も林崎三本松瓦窯の生産地出土の鬼瓦も範による製作で、特に林崎三本松瓦窯から出土している鬼瓦の特徴が永福寺出土鬼瓦に類似しています(第3図)。主観的な判断にはなりますが、突出する眼と眼の周辺を範の抜き取り後にヘラ状の工具等をもちいて内側から外側へ放射状に調整している様子は近いと考えられます。また、牙の向きも他の鬼瓦は下向きが多い中、上向きであるところも、林崎三本松瓦窯で生産された鬼瓦を鳥羽離宮でみて永福寺所用瓦にイメージしたのではないのでしょうか。ただ、葺き脚部分の形状が異なっており、これは屋根構造の違いの相違であると考えられます。岩戸満願寺の鬼瓦は、永福寺より多少遅れて製作にはいったものと考えられますが、同様に鳥羽離宮などにみられる鬼瓦の特徴とはまた異なります。眉部分に肉付けさせて沈線を施す意匠は、播磨にも尾張にもみられません。八事裏山瓦窯の瓦の供給があることから、尾張方面からのモデルを探してみましたが、該当しそうな個体は残念ながらみられませんでした。駿河では天神洞遺跡から鬼瓦の出土事例がありますが、範づくりの鬼瓦であることや陶器質の焼成とあることから尾張方面を産地とする鬼瓦の可能性が高いです(池谷2019)。むしろ、永福寺で出土している手作りの鬼瓦に沈線による表現がみられることから、永福寺からの影響を考えた方がよいのかもしれない。また、範型の可能性がある鬼瓦のルーツも、残存部位が狭い為、多くを追求することは困難です。今後、脚部などの部位が出土することによって屋根構造の判断も可能となりますので、資料の増加をまって再検討したいと思います。

やや緩い表情から我々がイメージする荘厳な鬼瓦に



【第3図】 鳥羽離宮、林崎三本松遺跡出土鬼瓦

近い鬼瓦になるのは、鎌倉時代後期にはいつてからといわれ、鬼瓦製作に関して変化があったと推測されています。瓦範の製作には、官営ないし寺営の工房に属する画工や絵師などが関与しているとされ、その後ろだてがなくなったことで緩い鬼瓦に変化したといわれています（山本 1998）。範の作成には、統制された技術系統のもと製作されたものであったのが、瓦づくり職人の手にうつり、見様見真似でつくようになっていった為、稚拙な表情の鬼瓦が一時期展開するのでしょう。鎌倉後期になると鬼瓦の表現がより盛り上がり、下顎が表現されるようになっていきます。顔面部を載せる地板がアーチ状から台形に変化し、珠文も大粒になります。鬼瓦はやがて「鬼師」とよばれる鬼瓦専門工人集団による製作となり、より立体的な威厳のある鬼瓦が製作されていきます。また、鬼瓦の変化は屋根構造の変化にも起因していると考えられています。8世紀後半頃から棟を高く積む傾向があり、野屋根構造が採用されるとさらに屋根勾配がきつくなり、

棟の高さも高くなっていく構造になっていきます。屋根の骨組みの上にさらに材を用い、もう一つ別の屋根を乗せると屋根は全体に高くなり、威圧感がでるような建物となります。したがって、隅棟や降棟を二段構成にして、高くなりすぎてしまった棟の高さを通減する構造が編み出されたと考えられます。それによって棟先をとめていた鬼瓦は、上段部分稚児棟に一つ（二ノ鬼）、棟端に一つ（一ノ鬼）、大小の鬼瓦が葺かれる構造となるのです（山本 1998）。二ノ鬼の出現については、12世紀後半の絵画資料により判断されることから、院政期頃には大小さまざまな鬼瓦があったことがわかり、出土資料の中で大小があるのは理由があったことがわかったのです（島田 2007）。

※参考文献については紙面の都合により省略しました。

# 満願寺遺跡出土の土器・陶磁器

## ―鎌倉出土品との比較から―

押木 弘己（鎌倉市教育委員会）

### はじめに

満願寺遺跡の調査では、大量の瓦に混じって土器や陶磁器の破片もわずかながら出土しています。満願寺と同じ時代、北西 20km の鎌倉は東国武家政権の都として急速な成長を遂げ、多くの人・モノ・情報が行き来しました。当時の満願寺に葺かれた瓦には鎌倉・永福寺との関係性がうかがえ、土器・陶磁器の様相も鎌倉と近似しています。

ただ、満願寺遺跡出土品における瓦と土器・陶磁器との間には、製作された年代に開きがあるようです。瓦は 12 世紀末～13 世紀前半の製作年代＝堂宇の創建・改修年代が考えられているのに対し、土器・陶磁器は 14 世紀代に主体があり、近世以降の製品も存在します。

このことは、取りも直さず瓦葺き建物が一定期間の存続時期を経たのち、土器・陶磁器類が持ち込まれたことを示唆しています。

土器皿＝「かわらけ」は消費地の近郊で生産されたローカルな製品で、東海地方など遠方からもたらされた陶磁器に比べると、製作から使用・廃棄に至る時間が短かったことが推察できます。本報告では、こうした出土品間の「時間差」も踏まえた上で、土器・陶磁器について、満願寺と鎌倉の出土品を見比べてみたいと思います。

### 満願寺遺跡出土の土器・陶磁器

【図 1】は、満願寺遺跡で出土した土器・陶磁器他の遺物実測図です。1～24・42 が「かわらけ」で、42 のみが「手づくね」という京都発信の技術で作られ、他は「ロクロ」＝回転台上で成形され、外底には糸で切り離した際の痕跡が残ります。「ロクロ」の器形は体部の湾曲が強いものが主体で、直線的な外開きタイプのものがあります。いずれも小破片から全体形状を復元した図であるため、口径など大きさには誤差があることをご承知ください。

25～34 は陶磁器類で、これも小片ばかりで全体形状の分かる資料はありませんでした。

### 鎌倉の「かわらけ」様相

【図 2】には、鎌倉の「かわらけ」変遷を掲載しました。源氏三代将軍の御所＝「大倉幕府」推定地の北東近く

で出土した資料で、幕府滅亡後も土地利用が大きく衰退することなく続いていたことから、12 世紀末～15 世紀前半の遺物変遷を、層位上の裏付けをもって把握できる鎌倉でも希少な例となっています。年代観は報告書の見解のまま示したので検討の余地はありますが、図面の下から上方に向けた「かわらけ」形状の変化が明瞭に見て取れます。

この変遷図に照らすと、満願寺遺跡の「かわらけ」は以下のように位置付けることができます。

42 の「手づくねかわらけ」は小片のため全体形状は知り得ませんが、鎌倉の「手づくね」存続期間であるⅠ～Ⅲ期に相当します。実年代の特定は難しいものの、前述した満願寺創建・改修年代に近い、13 世紀代に位置付けが可能な数少ない資料です。

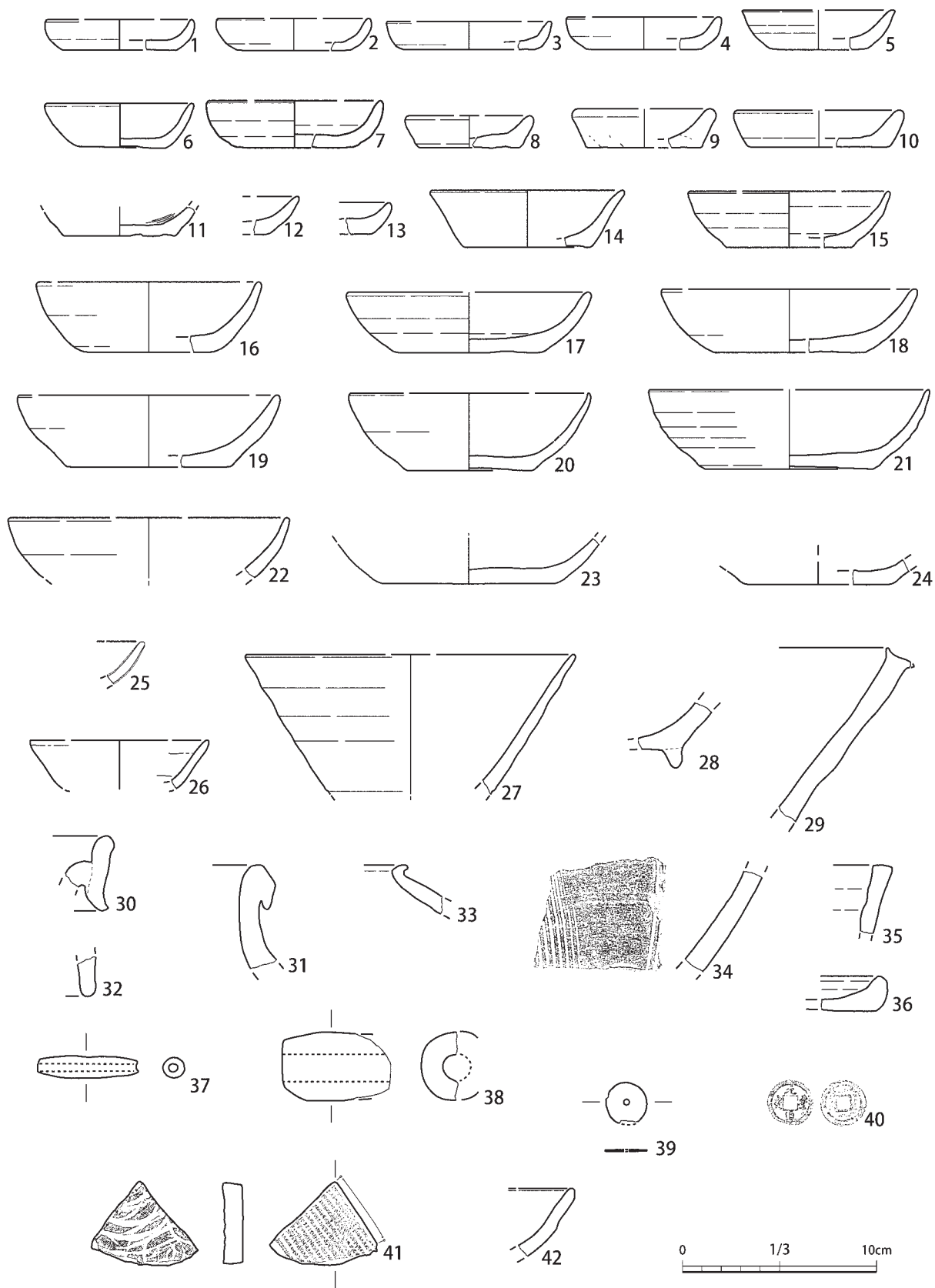
1～24 の「ロクロかわらけ」のうち、体部の湾曲が強いタイプは鎌倉のⅢ～Ⅳ期に、8～10・14 など外開き器形のものⅣ期以降に相当するでしょうか。

満願寺遺跡出土の「かわらけ」は鎌倉のものと同近似した胎土（粘土）で作られており、器形の上でも両者に明確な違いを見て取ることはできません。肉眼観察に頼る限り、両地域の「かわらけ」は供給元が共通していた可能性を考えても良いかもしれませんが。以上の比較検討に基づき、満願寺遺跡の「かわらけ」は 14 世紀以降の製品が主体となっていることが指摘できます。

### 陶磁器の様相

【図 2】には、図示はしなかったものの「かわらけ」にともなう陶磁器類の様相についても説明を載せています。満願寺遺跡の出土陶磁器は小片ばかりのため、使用時からそれなりの時間が経過したものが多でしょう。そのなかでも 14 世紀以降の製作年代を推定できるものが多く、「かわらけ」の年代観と合致する内容となっています。

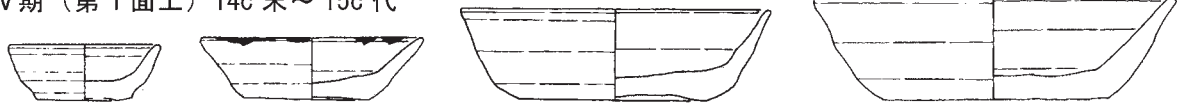
細片ゆえに全体の形を想像することは難しいですが、33 の渥美窯産短頸壺は、筆者自身も鎌倉で目にした経験がなく、注目したい資料です。比較対象としての確ではないかもしれませんが、神奈川県下では綾瀬市宮久保遺跡で「藤原」と焼成前のへら書きが施された渥美産短頸壺が出土しており、有名な資料です。【図 3】には、当例（左）と渥美・大アラコ 3 号窯出



【図1】 満願寺遺跡出土の土器・陶磁器類

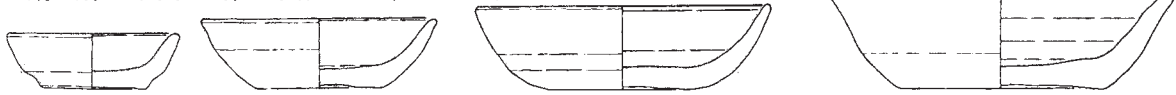


IV期（第1面上）14c末～15c代



- ・ロクロかわらけの・外反・厚手化が進行
- ・碗皿類は瀬戸窯製品が主体
- ・常滑甕は8型式まで
- ・瓦質土器の火鉢・風炉が目立つように

IV期（第1面下～第2面）14c末～15c代



- ・かわらけはロクロ製品のみ、外反・厚手化する段階
- ・瀬戸窯製品の碗皿が存在感を増す→貿易陶磁器は減少傾向に

III～IV期（第2面下～第3面）14c前～末葉



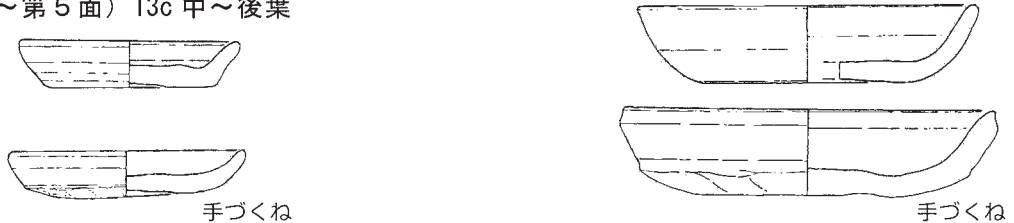
- ・手づくねかわらけが消失、かわらけはロクロ製品のものに
- ・龍泉窯系青磁の蓮弁文碗+坏皿類（細蓮弁文碗をともなう時期）
- ・白磁口禿碗・皿+口禿型押文皿
- ・常滑甕は6a型式まで

II～III期（第3面下～第4面）13c後葉



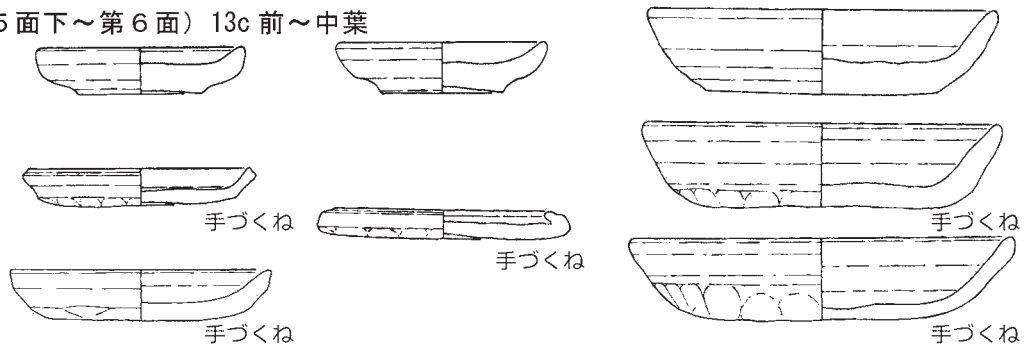
- ・龍泉窯系青磁の幅広蓮弁文碗が出現、坏皿類の大型品（盤）も
- ・白磁口禿碗が出現

II期（第4面下～第5面）13c中～後葉

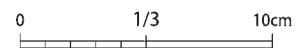


- ・龍泉窯系青磁の劃花文碗・皿が主体、同安窯系は減少
- ・白磁・青白磁は小物類が中心に
- ・常滑甕は5型式まで

I～II期（第5面下～第6面）13c前～中葉

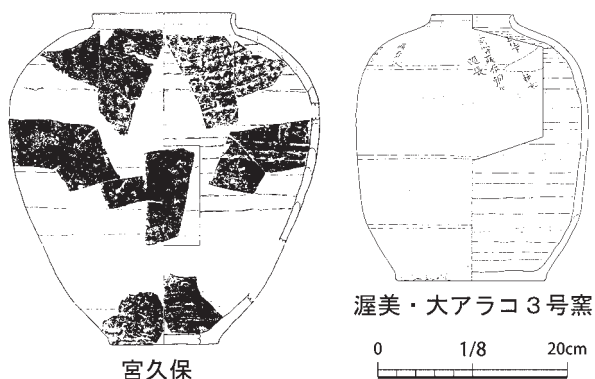


- ・龍泉窯系青磁の劃花文碗・皿が主体、同安窯系も定量
- ・白磁・青白磁も散見
- ・碗・壺+小物類



【図2】 鎌倉における「かわらけ」変遷の一例  
 (大倉幕府周辺遺跡群 二階堂字荏柄 58番4外地点)

土の作例を掲載しました。これらは、ヘラ文字の内容から藤原顕長が三河守に在任していた12世紀中頃の作品とされ、渋谷一族の居館跡とも推定される宮久保遺跡の建物群が、この頃に展開した可能性を示唆しています。鎌倉に幕府が成立する以前の、相模地域における流通や在地勢力の動向を考えるうえで貴重な資料といえるでしょう。



【図3】 渥美窯産「藤原」銘の短頸壺

細片であり、口縁部の屈曲具合も異なる満願寺遺跡の短頸壺ですが、創建期を含む満願寺の時代的特性を理解するに当たり、重要な情報を含んでいるのかもしれない。

おわりに

鎌倉の「かわらけ」は、儀礼や饗宴の場で大量消費されました。灯明皿としての使用例も多く、法会などでも用いられたことでしょう。

ここ満願寺遺跡での出土も何らかの法会との関係を想起させますが、今のところ出土量が少なく、断定には至りません。また、陶磁器も含め14世紀以降と思しき製品が主体となっている点、この時期の満願寺がどのような形で存立していたのかを考えるにあたって重要です。文献史学では満願寺の姿を追いかけにくくなる時期だけに、これら土器・陶磁器については、一層の精査・検討が求められます。



【図4】 中世鎌倉の概略地図（宗基秀明氏作成の原図を改変）

# 佐原一族と都市鎌倉・満願寺

渡邊 浩貴（神奈川県立歴史博物館）

## はじめに

三浦氏庶流の佐原氏は、近年文献史学にて政治史における観点で研究が進展しています。ですが、氏寺である満願寺をはじめとした本拠地での造寺・造仏活動の様相についてはなお多くの検討課題を残していると言えましょう。その一方で、満願寺では考古学より伽藍の遺構や瓦などの遺物に関する成果、また美術史学より同寺に安置される仏像群の造像年代や制作者の仏師に関する成果が提出されています。かかる隣接諸学の成果を踏まえるなら、氏寺満願寺を中心に佐原氏が創り上げた文化的環境の実態が分かるのではないのでしょうか。すなわち文化史の観点から佐原氏を捉えることで、政治史だけではなく、佐原一族のより豊かな姿を明らかにできるものと考えます。

そこで本稿では、鎌倉前期における佐原一族の文化活動に着目し、彼ら一族が築き上げた政治的地位や、京都政界・都市鎌倉と交流するなかで形作った人的ネットワークを明らかにしながら、満願寺の造寺を含む文化事業へとどのように結実していくのかを検討したいと思います。京都政界との強力な人脈が注目される三浦惣領家ではありますが、その一族の佐原氏の場合はいったいどうだったのでしょうか。

## 佐原氏による氏寺満願寺の形成過程

氏寺満願寺の創建年代は、近世地誌『三浦古尋録』に採録される寛文五年（1665）「満願寺総縁記」によると、源頼朝に従軍する佐原義連が西国へ赴くに際して一堂を寿永三年（1184）に建立し、帰郷の後に大伽藍を建立して満願寺と号したと述べられます。一般的に、合戦への参加を契機に鎌倉御家人の本拠地で仏堂が建立される事例は珍しくありません。奥州合戦に参戦する北条時政が文治五年（1189）に願成就院を建立し（『吾妻鏡』、実際は文治三年に建立）、同合戦に参加した足利義兼は、樺崎寺を建立しています（「鏝阿寺樺崎縁起并仏事次第」）。これらを勘案すると、先の由緒内容を近世縁起だからといって偽作と断定することはできません。佐原義連が、少なくとも寿永元年（1182）には「佐原」を名字と称していることから（『吾妻鏡』）、本拠地である同地にむしろ宗教施設をなの一つ置かなかったとは想定しづらく、小堂規模の施設があったことは認めてもよいでしょう。

さて、満願寺に安置される観音菩薩立像・地藏菩薩立像の二軀は、十三世紀初頭の慶派仏師によるもので、かつこれらの尊像構成が正治二年（1200）に北条時政が故頼朝一周忌に願成就院北隣に仏堂を建立した際のものとはほぼ一致しているため（『吾妻鏡』）、同時期頃の制作とみられています。仏像に着目するならば、先の縁起が記す創建年代と齟齬が生じます。

また満願寺遺跡での建物遺構からは、ある段階で建替えや既存建造物の規模拡張を含む再建がなされたことを示しており、これら伽藍配置の形成は日想観の行儀を記す『観無量寿経』の影響が想定されています。満願寺への浄土教の影響を考えると、以下の史料は佐原氏による造寺活動の一端を示します。

【史料1】元仁元年（1224）十月「泉涌寺不可棄法師伝」（『新横須賀市史I』748号）

同冬十月、依肥州刺史平家連之請、下向関東、經過十六馭亭、銜壳之女忘脂粉而受戒、漁獵之男抛網竿而聞法、遂到家連三浦館、供養梵宇、投歩鎌倉、二品禪定比丘尼（北条政子）諱如実、并武州刺史平泰時朝臣受菩薩戒、総逗留鎌倉一七日間、或授戒法、或讚仏経、道俗顯々、昼夜無間、

【史料1】によると、京都泉涌寺開山で入宋経験のある俊苧が、佐原家連の招請で「家連三浦館」に招かれ、「供養梵宇」を催したという内容です。佐原氏本拠地での仏堂供養であり、かつ著名な俊苧の招請となれば、満願寺での大規模供養が想定されます。

このように満願寺に関する文献・考古・美術分野の史料を通覧してみますと、同寺の創建にあたっては、ある特定の時期だけに起点や画期を求めるのではなく、段階的に形成されてきたものと捉えた方がより実態に合っているように思われます。それでは次章より、満願寺において慶派仏師が関わる時期、俊苧が招請される時期での佐原一族の文化的環境を順番に見てみましょう。

## 佐原氏と慶派仏師の邂逅—在京活動と源頼朝—

佐原氏が慶派仏師と関わる契機に、源頼朝による建久六年（1195）の東大寺供養のための上洛が考えられます。ここに佐原義連・景連父子が参加しています。この東大寺供養には多くの鎌倉御家人が参列し、京・南都での本場の仏教文化に触れる機会にもなりまし

た。例えば、供奉を勤めていた武蔵国御家人畠山重忠は、在京期間中に梶尾山の明恵に謁談して浄土宗法門について談議し（『吾妻鏡』）、同国御家人津戸為守や上野国御家人大胡実秀も東大寺供養で上洛し法然と出会い浄土宗に帰依しています（『法然上人伝記』『津戸消息事』、「大胡実秀へつかはす御返事」）。また武蔵国御家人小代行平も供養に参列し、後に奈良仏師快慶による建仁三年（1203）制作の醍醐寺不動明王像の結縁者にも名を連ねています。

後白河院との対面、東大寺供養という二度にわたる頼朝の上洛は、多くの京都文化を鎌倉に持ち帰る機会にもなりました。造像については、当時後白河院のもとで活躍する奈良仏師康慶との知己を得て、後に頼朝は永福寺造営期間中に、仏師康慶の鎌倉下向を京都に打診しています（『藤原範綱書状』『和歌真字序集（扶桑古文集）』）。以後、頼朝周辺の造像では康慶を、その他有力御家人北条氏・和田氏・足利氏の造像では弟子運慶が起用されるなど、慶派仏師との交流がうかがえます。二回目の東大寺供養のための上洛では、広く康慶・運慶・快慶らが携わって完成させた東大寺南大門の諸像など、慶派仏師の活動を有力御家人足利氏をはじめその他中小御家人たちが目にする機会となりました。そうした点を踏まえると、佐原義連・景連父子が二回目の東大寺供養に供奉して慶派仏師の活動を目の当たりにし、京都社会で交流を持ち、その後本拠地の氏寺満願寺での造像依頼に結実したことも十分推測されます。

加えて佐原義連の本拠地にて慶派仏師による造像が行われた背景に、慶派仏師を多く起用した源頼朝の影響が考えられます。佐原氏と源頼朝との関係をみる際に、次の史料は大変興味深いです。

【史料2】『吾妻鏡』養和元年（1181）四月七日条

七日壬子、御家人等中、撰殊達弓箭之者無御隔心之輩、毎夜可候于御寝所之近辺之由定云々、<sup>（北条義時）</sup>江間四郎・下河辺庄司行平・結城七郎朝光・和田次郎義茂・梶原源太景季・宇佐美平次実政・榛谷四郎重朝・葛西三郎清重・三浦十郎義連・千葉太郎胤正・八田太郎知重、

この史料は、養和元年（1181）に「毎夜可候于御寝所之近辺之由被定」と頼朝の寝所警固を担当するために選定された、北条義時・下河辺行平・結城朝光・和田義茂・梶原景季・宇佐美実政・榛谷重朝・葛西清重・三浦義連・千葉胤正・八田知重の十一名を記した記事です。いずれも頼朝挙兵以来の三浦義明や北条時

政・八田知家の子息、つまり二世世代の御家人で構成され、実際にも頼朝寝所を中心に身辺警護を担い（文治五年（1189）に頼朝が彗星を見るため寝所を出た際、佐原義連・結城朝光・梶原景季・八田知重が警固しています）、「皆近臣也」と記録されました（『吾妻鏡』）。昵近衆とも呼べる頼朝の近臣集団は、有力な御家人のなかより一族の惣領が健在でかつ次世代を担うべき人材たちが選出されており、血縁や乳母の関係を通じて頼朝個人と密接な関わりがあります。

先述した北条義時の父時政が建立した願成就院や、文治五年（1189）に和田義茂の兄義盛らが願主となった浄楽寺において造像を運慶が担当しており、頼朝と個人的に関係の深い御家人への文化的影響力は非常に大きかったことが窺えます。佐原義連の本拠地において、1200年頃に慶派仏師の造像が行われたことも頼朝周辺での造像環境が彼の近臣である義連に影響を与えたことは容易に想像できます。義連の慶派仏師起用による造像の結果、当初は小堂であった氏寺も、次第に頼朝の文化的影響を受けつつ寺格を整えていったのでしょう。

慶派仏師による満願寺の諸像は、こうした佐原義連・景連父子の東大寺供養参列や源頼朝との個人的な関係の深さの結果、もたらされた文化受容の遺産と理解できるのではないのでしょうか。

#### 北条時房と佐原家連—都市鎌倉での政治的地位—

ただし、満願寺の形成過程を文献史料でみた場合、やはり【史料1】で示した元仁元年（1224）に招請された俊弼の来訪と仏堂建立は重要な意義を持ったことに間違いありません。とくに満願寺遺跡で見られる堂舎の建替えや規模拡張の様相は俊弼招請の時期とリンクする可能性が高く、寺容整備および伽藍形成へと進んだと思われます。では、なぜ佐原氏は著名な僧侶俊弼を招請できたのでしょうか。

俊弼が三浦館に招請される以前、佐原景連という人物がしばしば幕府椀飯役や社寺への將軍参詣の随兵などを勤め、またその子息景義も同様に幕府儀礼に従事し、鎌倉周辺での活動が目立ちます。しかし承久の乱後になると、景連の兄弟である家蓮が、紀伊国守護や肥前守に補任されます。さらに家蓮は執権北条一族との関わりが深く、安貞二年（1228）に北条時房の子息時直に嫁した娘が男子を出産しており（『吾妻鏡』）、すくなくとも同年以前から北条時房との関係が築かれていました。翌年には時房主催の椀飯で家連が行藤・

沓役を勤め（しかも「左衛門尉」に任官しています）、以後は毎年のように参加がみられることから、急速な北条氏への接近があったとみられます。寛元三年（1243）の將軍藤原頼経の臨時出御供奉人を定めた際には、佐原氏の序列の中で家連が最上位で記載されています（『吾妻鏡』）。

以上の佐原一族での動向に鑑みると、俊苧を招請した元仁元年（1224）段階では、すでに佐原一族のなかで執権北条一族に接近した家連が有力勢力として位置付けていたと考えられます。とくに家連と俊苧を結ぶキーパーソンとして、嘉禄元年（1225）まで六波羅南方探題を勤めた北条時房が重要になってきます。時房は執権北条氏氏のなかで在京活動を担い、彼の拠点となった六波羅探題の地は、俊苧が開山となった泉涌寺と極めて近い地理環境にありました。加えて、時房は建保六年（1218）に、実朝の後継者問題について会見を行うため上洛した政子に同行し、承久元年（1219）の三寅（九条道家の子息、後の頼経）下向の交渉にも加わっていました。三寅が誕生する際、道家室の倫子の出産時の戒師を俊苧が勤めているなど、入宋僧俊苧と九条家との関係は彼が帰朝した早い時期から築かれており、家連が俊苧との間に接点を持ち得た背景に、九条家との繋がりのある北条時房を介した人的関係があったと考えられます。

さらに、俊苧の三浦・鎌倉下向の背後には、執権北条氏の意向も垣間見えます。俊苧は家連の三浦館で仏堂供養を行った後、その足で鎌倉へ赴き北条政子・泰時の戒師を勤め同地で半月ほどの滞在をしています。この時期、在京活動を担った時房は、幕府首脳陣の一人として執権北条義時の死後も鎌倉に戻らず探題として在京を続け、幕府の歳首椀飯儀礼では幕府内序列のトップに位置付けていました。俊苧の下向は、時房との人的関係を通じて、すでに三浦・鎌倉の地での彼の活動が予定されていたからこそ、上記の行程が組まれたものと考えられます。俊苧の鎌倉下向は、三浦家連を媒介として北条時房・政子・泰時ら執権北条一族の意向によってなされた事業だったと想像されるのです。

いずれにせよ、佐原家連による俊苧招請と仏堂供養は、北条時房への接近がもたらした文化事業と考えられましょう。佐原氏が鎌倉幕府政治のなかで一定の地位を築き、都市鎌倉へもたらされる文化を、北条氏との密接な関係を通じて自身の本拠地へ導入していたことが分かるのです。

## おわりに

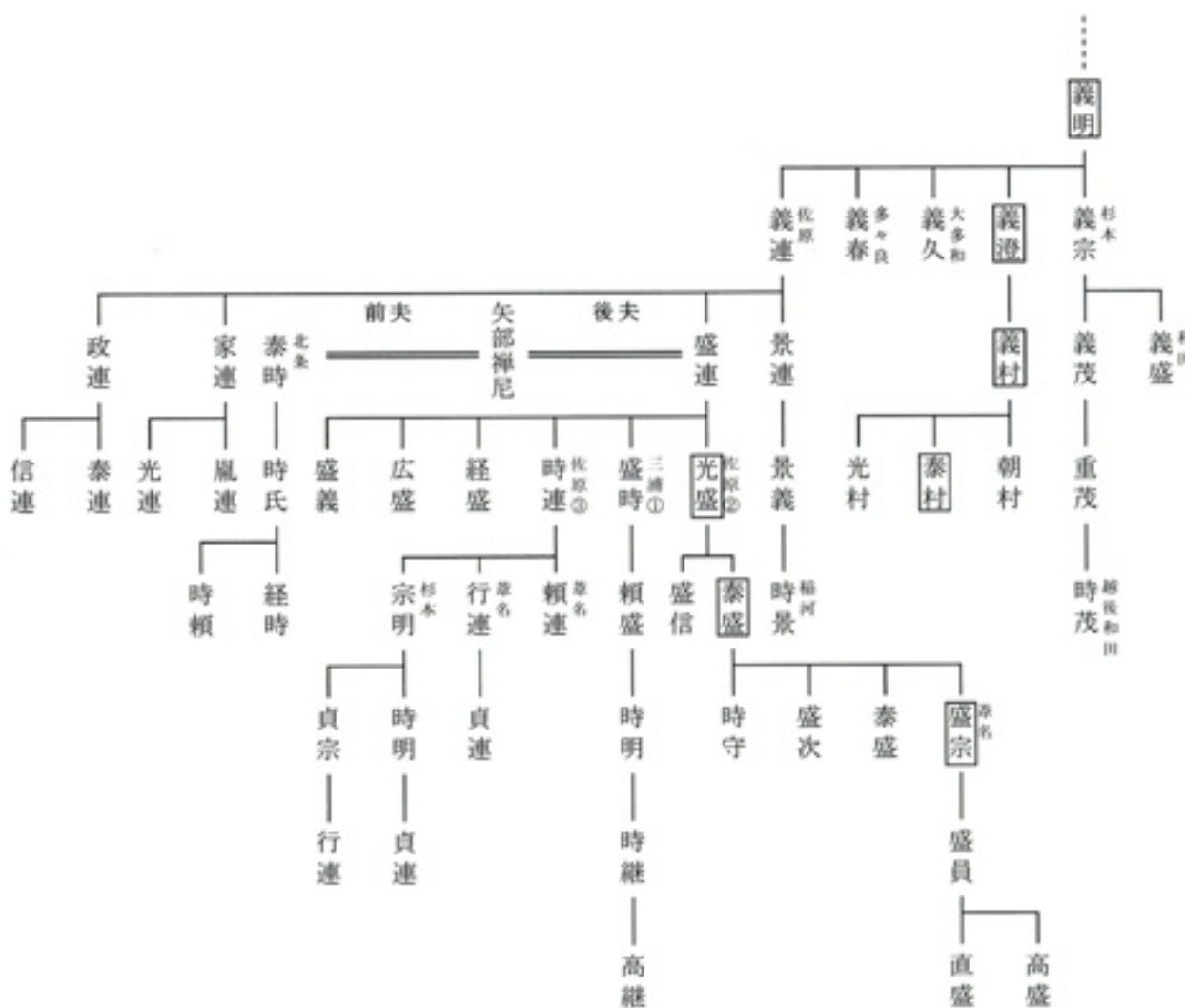
満願寺の創建および以後の伽藍形成は、「満願寺総縁記」にあるような佐原義連期に創建された小堂をベースとしつつも、満願寺の造像に関しては、東大寺供養による佐原義連・景連の上洛や源頼朝との個人的な関係の深さが慶派仏師と接触する機会となって同寺に慶派仏師の作例がもたらされたこと、そして、執権北条氏（時房）との関係を強化した家連の俊苧招請によって寺容整備および伽藍形成へと段階的に行われたこと、を指摘しました。

佐原氏は、三浦惣領家とは異なる独自のネットワークを京都・鎌倉に結びながら文化活動を進め、本拠地の満願寺に慶派仏師の諸像や浄土伽藍を創り上げていったのです。とりわけ、源頼朝周辺の文化環境や北条時房・泰時・政子など幕府首脳陣が傾倒する浄土信仰の影響を佐原一族が多分に受けていることは注目されます。当該期の鎌倉御家人たちの文化と言えは京都からの影響と理解されがちですが、和田義盛発願による浄楽寺の運慶仏の存在や、三浦義村による浄蓮房源延（すでに鎌倉に滞在）を招いての三崎海上での迎講実施は、京都だけにとどまらない頼朝や鎌倉での文化交流とその影響力のほどが想像されます。鎌倉が東国における文化発信地になりつつあることをこうした事例は示しているのかもしれませんが。満願寺は佐原一族が頼朝周辺や鎌倉で紡いできた文化活動の成果が凝縮された場といっても過言ではないでしょう。

## 【参考文献】

- 岩田慎平「北条時房論—承久の乱以前を中心に—」（『古代文化』68、2016年）
- 鈴木かほる「鎌倉後期の三浦佐原氏の動向」（『三浦一族研究』4号、2000年）
- 高橋秀樹「佐原義連とその一族」（同『三浦一族の研究』吉川弘文館、2016年）
- 西谷功「泉涌寺開山への諸相」（同『南宋・鎌倉仏教文化史論』勉誠出版、2018年）
- 横須賀市『岩戸満願寺—満願寺境内遺構確認調査報告—』横須賀市教育委員会、1992年
- 横須賀市『新横須賀市史 別編 文化遺産』横須賀市、2009年
- 横須賀市『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』横須賀市、2012年
- 渡邊浩貴「三浦佐原一族の本拠と造寺活動—満願寺出土中世瓦群との関連から—」（『総合研究 岩戸満願寺遺跡の研究—三浦半島における鎌倉時代寺院の瓦—』神奈川県立歴史博物館、2023年）

# 三浦佐原氏略系図



**【凡例】**

□…惣領の地位にあった者（佐原（輩名）盛宗以降は未詳）

—…婚姻関係を示す

三浦①…「三浦介」を継承した盛時系佐原氏

佐原②…佐原氏惣領職を継承した光盛系佐原氏

佐原③…在京活動などを主に担った時連系佐原氏

※本系図は『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』（横須賀市史、2012年）を参照しつつ、筆者が適宜加除を行った。

【系図】 三浦佐原氏略系図

# 満願寺の木造菩薩立像について

大澤 慶子（文星芸術大学）

満願寺には見上げるばかりに大きく、重量感あふれる菩薩立像と地藏菩薩立像が安置されています（図1）。前者は像高224.2cm、髪際高が186.7cm、後者は像高203.7cm、髪際高185.5cm、どっしりした体軀、大きな顎と厳しいまなざしに圧倒されます。

菩薩像は髻を高く結び、上半身に条帛と天衣を懸け、下半身に裙と膝までの長さの腰布を着け、左手をあげて蓮茎を執り、右膝を緩め腰を左に捻ります。この姿は、運慶（?-1223）の文治5年（1189）横須賀・浄楽寺阿弥陀三尊両脇侍像とよく似ています。しかし、横から見た胸や腹部のボリュームたっぷりの体つきは、彼の像を凌駕し、他の同時代像に類をみません。いったいこのお像は、いつ、だれがどのような事情で造ったのでしょうか。

地藏菩薩像も同様の作風ですが菩薩像をさらに詳しく見てみましょう。注目される点が3つあります。

ひとつ目は着衣表現です。左肩から懸かる条帛は、膨らんだ腹にのせるように少し狭めて表します。この形は浄楽寺像によく似て、このほか文治2年（1186）静岡・願成就院不動明王像、正治3年（1201）岡崎・滝山寺聖観音・梵天像などの運慶作品に確認できます。しかし、浄楽寺像に近似し運慶の可能性も高い京都・清水寺伝観音菩薩・勢至菩薩像や、運慶周辺の宗慶（建久7年（1196）作埼玉・保寧寺阿弥陀三尊像）や実慶作（承元10年〔1210〕静岡・修禅寺大日如来像や建仁2年〔1202〕頃の阿弥陀三尊像〈かなみ仏の里美術館〉）の脇侍像にも見られません。運慶の作品以外ではこの像が確認できる希少な例なのです。

一方で、満願寺像の膝までの腰布を着ける形は、先の浄楽寺像や清水寺像だけでなく、快慶作例にもみられます。運慶作例が髻を写実的にあらわすのと違い、満願寺像は髻を左右対称に、きわめて形式的にあらわします。これは快慶の益子・地藏院、兵庫・浄土寺の阿弥陀三尊像脇侍像など建久年間の作例に共通します。

二つ目は、髻の形です。頭髪の表現は地髪部、髻ともに毛筋彫りで、髻のみ束ね目をあらわします。髻は下元結を毛束で結び、上元結は紐二条、その上に花卉五条の形に結び目をあらわします。正面や横から見ると、安元元年（1174）の運慶の円成寺像をはじめとする慶派の大日如来像や、浄楽寺像と同年の快慶作ボ

ストン弥勒菩薩像に通じます。しかし、後部は長さの異なる4束を上から段々に垂らす形で（図2）、円成寺像など、後ろで左右に振り分けて結う形とは異なります。慶派の菩薩像の髻の形は、奈良仏師の康助と推定される仁平元年（1154）奈良・長岳寺像をはじめ、髻を上下二段に結うのが通例です。本像の形式は、確認できる鎌倉時代前期の作品には類例が見つかりません。

三つ目は臂釧の形です（図3）。立体的で重厚なつくりが、鎌倉・永福寺出土の荘厳具の飾金具（図5）と共通することが注目されてきました。永福寺は建久3年（1192）に二階堂、続いて阿弥陀堂、薬師堂が建立され、仏像は運慶が造立した可能性が指摘されています。

満願寺像臂釧の基本帯は、上から紐・連珠・紐・単弁の蓮華花卉を連ねる列弁で構成されます。側面の飾金具は、単弁八葉蓮華文の左右に半切菊花文、その外側に透かし彫りの如意形の飾りを配します。上下方部中央から左右に渦を巻く雲文を配し、その先に火炎宝珠形、さらにその先に珠文、上部ではさらにその上に台座に乗る宝珠形をあらわします。基本帯上下方部には、それぞれ左右から蕨手状の飛雲文を配します。

臂釧の意匠については密教図像を典拠とすることが指摘されています。図像では京都・醍醐寺大日金輪像などに単弁蓮華文や単弁を列状に配する臂釧などが確認され、運慶の円成寺大日如来像の胸飾り、運慶作の可能性が高い半蔵門ミュージアム大日如来像〈建久4年（1193）旧足利・樺崎寺像〉の天冠台飾り、足利・光得寺大日如来像〈建久10年（1199）頃か〉台座框座飾金具、滝山寺聖観音像の宝冠などに単弁蓮華文が見いだされます。ここで注意されるのは、半蔵門ミュージアム像や光得寺像では単弁八葉蓮華文、円成寺像と滝山寺聖観音像宝冠では、単弁十葉や十一葉の蓮華文を使用する点です。運慶の建久年間の作品に単弁八葉蓮華文の使用が確認されるのは満願寺像の年代を考える上で注視されます。ちなみに永福寺出土の飾金具は複弁八葉蓮華文で、同寺の創建当初の軒丸瓦にも同じ意匠がみられます。

以上の特徴と、満願寺の創建と歴史をあわせ、造像時期について考えてみましょう。

満願寺の創建に関しては、寿永3年（1184）三浦

義明（1092-1184）の末子佐原十郎義連（？—1207以前）創建説と、建久5年（1194）に頼朝が三浦義明供養のため、三浦矢部郷内に一堂を建立（『吾妻鏡』）という記事に充てる説があります。後者の説は、頼朝が文治5年（1189）に発願した鎌倉・永福寺との関連において注目されています。永福寺は建久3年（1192）に二階堂、翌4年に阿弥陀堂が供養され、翌年供養の薬師堂像には北条政子の願意により周丈六薬師如来像、八尺日光・月光菩薩像、六尺不動明王・毘沙門天像、等身十二神将が安置されており（「鎌倉薬師堂供養表白」国立歴史民俗博物館本『転法輪鈔』）、満願寺像が周八尺に相当することから、永福寺像と同規模の運慶工房による造像との見方があります。つまり、ひときわ大きな満願寺像の造立背景に將軍家の関与を想定する解釈です。

永福寺の立体的な飾金具の類似や、政子寄進という横須賀・曹源寺の十二神将像（『新編相模国風土記稿』）を永福寺薬師堂像模刻像と考える説も、これを補強します。

満願寺像の造像はいつ頃と考えられるでしょうか。運慶の玉眼使用には、尊像による採否がありました。文治5年（1189）年の浄楽寺像では玉眼を使用せず、建久4年（1193）半蔵門ミュージアム像では玉眼を使用します。同時期の永福寺像も玉眼であった可能性が高いでしょう。これを経て宗慶や実慶など周辺仏師の間で玉眼使用が広まり、満願寺像もこうした中で製作されたことが推測されます。飾金具の意匠から、運慶が単弁八葉蓮華文を使用した、建久4年（1193）の半蔵門ミュージアム像、建久10年（1199）頃の光得寺像の影響を考えると、正治3年（1201）滝山寺像以前に推定できるかもしれません。

作者は浄楽寺像の像内銘札「小仏師十人」に記される、近しく運慶に接し、同時に快慶作品をも参照することができた仏師だったのではないのでしょうか。

#### 【挿図出典】

図1～3は、東北大学大学院文学研究科東洋・日本美術史研究室編『東日本に分布する宗教彫像の基礎的調査研究—古代から中世への変容を軸に』2010

#### 【参考文献】

浅見龍介「満願寺蔵 菩薩立像・地藏菩薩立像」（『国華』1287）2003

神奈川県立金沢文庫『特別展靈験仏—鎌倉人の信仰世界—』

2006

東北大学大学院文学研究科東洋・日本美術史研究室編『東日本に分布する宗教彫像の基礎的調査研究—古代から中世への変容を軸に』2010

三本周作「鎌倉時代前・中期における仏像の金属製荘嚴具—意匠形式の分類と制作事情を中心に—」（『仏教藝術』313）2010  
奥健夫「曹源寺十二神将像小考」（『Museum』668）2017

横須賀美術館・神奈川県立金沢文庫『運慶 鎌倉幕府と三浦一族』2022

山本勉「永福寺と運慶」（神奈川県立歴史博物館『源頼朝が愛した幻の大寺院 永福寺と鎌倉御家人— 荘嚴される鎌倉幕府とそのひろがり—』）2022

渡邊浩貴「三浦佐原一族の本拠と造寺活動—満願寺出土中世瓦群との関連から—」（神奈川県立歴史博物館『総合研究岩戸満願寺の研究—三浦半島における鎌倉時代寺院の瓦—』）2023

三本周作「快慶作品における金属製荘嚴具について—仏師と金工をめぐる一試論—」（奈良国立博物館『仏師快慶の研究』）2023





【图1】 満願寺地藏菩薩立像・菩薩立像



【图2】 満願寺菩薩像 髻後部



【图3】 満願寺菩薩像 臂釧



【图4】 永福寺出土荘嚴具飾金



シンポジウム

満願寺の瓦からみる三浦一族 —満願寺遺跡調査成果報告会—

発行年月日 令和6年(2024)1月28日

発行 神奈川県立歴史博物館

〒231-0006 神奈川県横浜市中区南仲通 5-60

TEL 045-201-0926 FAX 045-201-7364

印刷・製本 株式会社 TAKT-JAPAN



神奈川県立歴史博物館  
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History



<https://ch.kanagawa-museum.jp/>



@kanagawa\_museum

